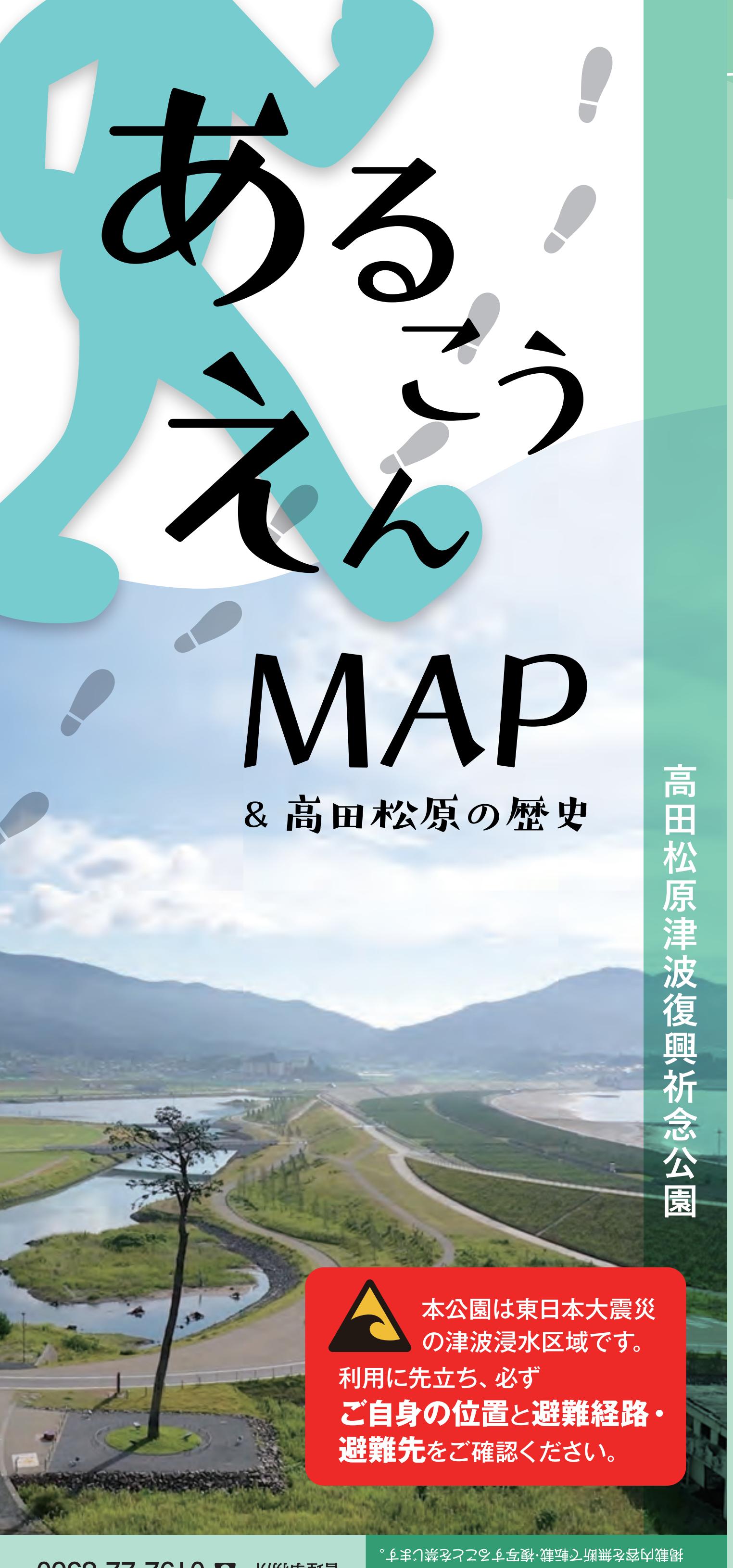


あるこうえん MAP

& 高田松原の歴史

高田松原津波復興祈念公園

本公園は東日本大震災の津波浸水区域です。
利用に先立ち、必ず**ご自身の位置と避難経路・避難先をご確認ください。**

陸前高田の四季の魅力

青字：イベント　黒字：旬の食べ物

春 3～5月
- 東日本大震災追悼式
- ワカメ・メカブ
- 桜ライン 311 植樹祭
- 白魚の踊り食い
- 氷上山山開き

白魚の踊り食い

夏 6～8月
- ウニ
- 気仙川アユ漁解禁
- 高田松原海水浴場海開き
- イシカゲガイ
- 高田松原除草ボランティア
- 高田町うごく七夕
- 気仙町けんか七夕

気仙川アユ漁解禁

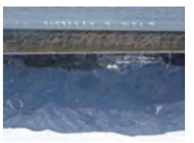
高田町うごく七夕

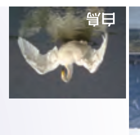
秋 9～11月
- 米崎リンゴ
- カニのふわふわ（川蟹汁）
- 雪っこ販売開始
- 産業まつり
- 根岬梯子虎舞
- たかたのゆめ新米出荷
- 広田湾のカキ
- 桜ライン 311 植樹祭
- 気仙川サケ遡上
- 北限のゆず収穫
- アワビ漁解禁

産業まつり

広田湾のカキ

冬 12～2月
- 白鳥飛来の最盛期
- 早採りワカメ
- イチゴ狩り




白鳥

このリーフレットは、高田松原津波復興祈念公園市民協働グループ有志が参加し、「水辺・絆プロジェクト」（国土交通省・（一社）東北地域づくり協会）の支援を受けて企画・作成したものです。

水辺から地域を元気に
水辺・絆プロジェクト

参加団体
一関プランターズ
高田松原津波復興祈念公園協働推進グループ
高田松原を守る会
ラムサールを目指す会
陸前高田グローバルキャンパス
陸前高田「ハナミズキのみち」の会
陸前高田被災地語り部くぎこ屋
陸前高田フラワーロードを応援し隊!

作成協力
（一社）トナリノ ／（一財）公園財団

高田松原津波復興祈念公園、陸前高田へ
まただいん！
（また来てね）
わんこきょうだい
うにっち

三陸ジオパーク
Sanriku Geopark

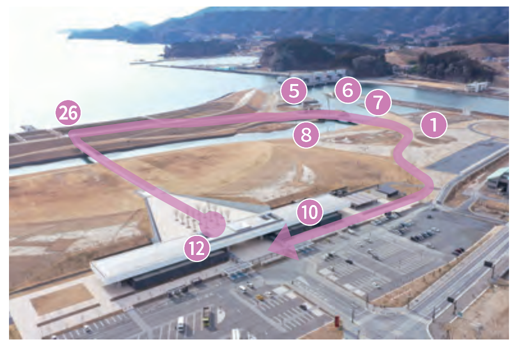
掲載した情報は、2023年1月時点のものです。
掲載内容を無断で転載・複写することを禁じます。

お問合せ
岩手県立高田松原津波復興祈念公園
管理事務所　☎ 0192-22-8560

おすすめ モデルコース

A コース 約1.3km
これだけは絶対見てってけろ！
入門者向け・定番コース

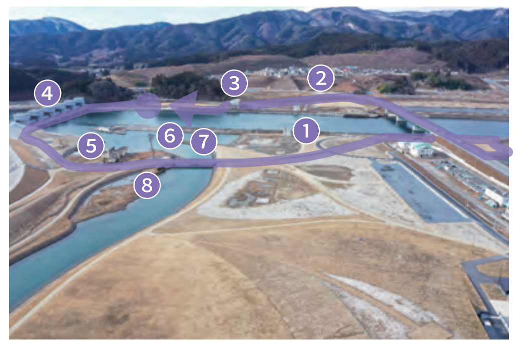
道の駅高田松原・東日本大震災津波伝承館（BRT奇跡の一本松駅）を起点に、国営追悼・祈念施設、海を望む場、陸前高田ユースホステル、奇跡の一本松など、本公園の主要な見どころを巡る定番コースです。



- START 道の駅高田松原駐車場
- ⑫ 東日本大震災津波伝承館
- 追悼の広場・祈りの軸
- ㉖ 海を望む場
- ⑧ 高田松原の根株
- ⑤ ユースホステル周辺の海浜植物
- ⑥ 奇跡の一本松
- ⑦ 一本松の背後の橋（しおさい橋）
- ① 「希望のかけ橋」とベルトコンベアの基礎
- ⑩ 道の駅高田松原
- GOAL 道の駅高田松原駐車場

B コース 約2.3km
陸前高田が誇る清流をご堪能あれ！
気仙川ぐるっと一周コース

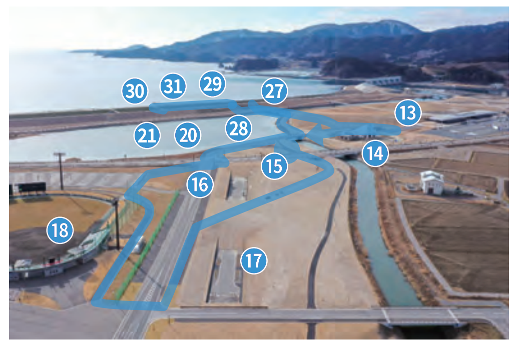
気仙川の河口をぐるっと一周するコースです。気仙中学校、奇跡の一本松、陸前高田ユースホステルなど、多くの震災遺構を見ることができます。また、気仙川にかかる橋からは、美しい流れやさまざまな生きものも観察できます（11月頃にはサケの遡上）。



- START 気仙中学校駐車場
- 気仙川対岸からの奇跡の一本松
- ④ 気仙川水門
- 気仙川河口の眺め
- ⑤ ユースホステル周辺の海浜植物
- ⑥ 奇跡の一本松
- ⑧ 高田松原の根株
- ⑦ 一本松の背後の橋（しおさい橋）
- マリーナ跡（水に触れられる場所）
- ① 「希望のかけ橋」とベルトコンベアの基礎
- 気仙大橋からの気仙川、一本松、気仙中学校への眺め
- ② 旧国道45号
- ① 「希望のかけ橋」とベルトコンベアの基礎
- ③ 気仙中学校
- GOAL 気仙中学校駐車場

C コース 約2.9km
川から海へ、自然も歴史も、もりだくさん！
健脚向け・欲張りコース

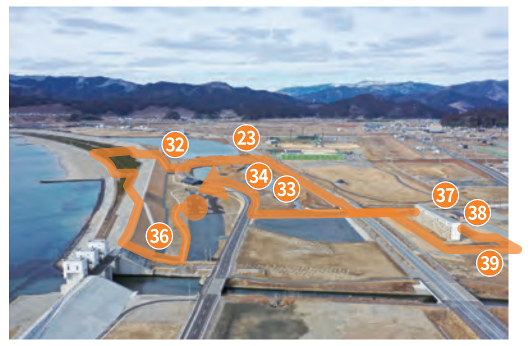
古川沼、白砂青松の高田海岸をはじめ、タピック45（震災遺構）など、川から海へ、自然も歴史も、公園の魅力をたっぷり満喫できるコースです。県内最大の天然湖沼の古川沼では、一年中さまざまな野鳥を観察することができます。



- START 古川橋駐車場
- ⑮ 避難トンネル
- 避難園路：ハナミズキ
- ⑰ 震災前のJR大船渡線の踏切跡
- ⑱ 高田松原運動公園
- ⑯ ハナミズキの道
- ⑳ 震災直後の古川沼
- ㉑ 古川沼の階段（白鳥が見える）
- ㉗ 松原大橋からの古川沼
- ㉘ 啄木の歌碑
- ㉙ 高田松原と広田湾
- ㉚ 高田松原の再生活動
- ㉛ 海水浴場西側の海浜植物
- ⑬ DNAマツとヒカミサンベニヤマボウシ
- ⑭ タピック45とその周辺
- GOAL 古川橋駐車場

D コース 約3.0km
よーく見るとたくさんの生き物が棲んでいます！
ちょっとディープな自然満喫コース

古川沼の野鳥や水生植物、高田松原や高田海岸の海浜植物など祈念公園内のさまざまな自然の魅力を満喫できるコースです。新しい公園ですが、もうすでにたくさんの生き物たちが棲んでいます。



- START 公園管理事務所駐車場
- ㊱ 浜田川河口の小さな自然再生
- 浜田川河口～浜田川河口水門～防潮堤東端からの高田松原
- 高田松原・高田海岸
- ㉜ 防潮堤のり面のハマエンドウ
- ㉞ 古川沼の東端部
- ㉓ 旧最上堂橋
- ㉝ 古川沼のシラサギ
- ㊲ 下宿（しもじゅく）定住促進住宅
- ㊳ 津波を乗り越えた桜（ソメイヨシノ）
- ㊴ ミズアオイ
- 小泉川
- GOAL 公園管理事務所駐車場

公園概要

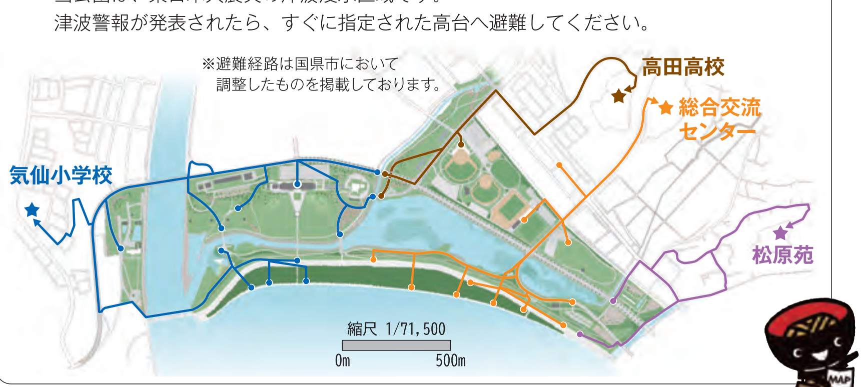
高田松原津波復興祈念公園は、東日本大震災津波の犠牲者を追悼・鎮魂し、震災の事実と教訓を継承するとともに、まちづくりと一体となった地域の賑わいの再生に資することを基本理念としています。
令和元（2019）年9月22日、公園の主要施設である国営追悼・祈念施設の一部、道の駅高田松原や東日本大震災津波伝承館がオープンし、これまでにたくさんの方が来園されています。
令和3（2021）年4月には国営追悼・祈念施設周辺を中心としたエリアが供用開始となり、同年12月に公園の全面オープンに至りました。

市民協働グループの取組

当公園の基本計画（2015）では、基本方針の一つとして、当公園を市民、NPO、企業など多様な主体が、植樹活動、伝承活動、防災学習活動、施設維持管理など、公園の計画・整備や管理運営において様々な形で参加・協働できる場とすることを定めています。その基本方針を踏まえ、平成30（2018）年に公園管理者とともに公園の管理運営に一緒に取り組む協働グループを募集し、令和4（2022）年12月末時点で29団体が登録しています。協働グループでは、高田松原の植樹や語り部活動のほか、複数グループで連携したイベント（公園オープニングイベント等）を開催しています。

緊急時避難経路

当公園は、東日本大震災の津波浸水区域です。
津波警報が発表されたら、すぐに指定された高台へ避難してください。



わんこきょうだい・そばっち

高田松原の歴史

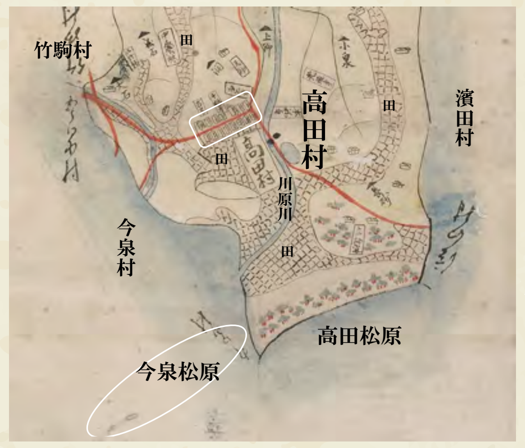
たかたのゆめちゃん

1667 寛文7年　高田松原の起源

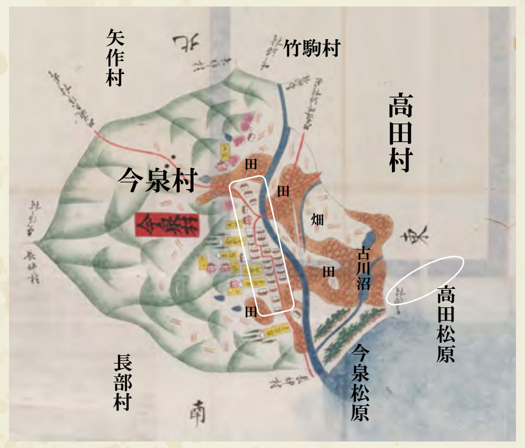
昔は「立神浜」（たつがみはま）と呼ばれ、不毛の地で、潮風が絶えず砂塵を後背地に吹き上げ、耕地は埋没荒廃し、作物は収穫皆無ということもしばしばありました。この荒れ果てた高田村沿岸の背後地の耕地を守るため、高田村肝入の菅野杢之助（もくのすけ）が最初に松を植林したのが、寛文7(1667)年でした。約半世紀後の享保年間（1716－36）には、今泉村の松坂新右衛門が、西隣にあった今泉村の海岸に、同じ目的で松の植林を始めました。歴史的に、高田松原とは、高田村の松原と今泉村の松原の総称なのです。（参考資料：陸前高田市史）

1822 文政5年　江戸時代の高田松原

高田松原の原風景はどのようなものだったのでしょうか。幸い、我々は、最初の植林から155年後の高田松原と今泉松原の風景を、文政5（1822）年に作成された高田村と今泉村の絵図の中に見ることができます。これらの絵図は、仙台藩が気仙郡の24ヵ村に作成させた絵地図（岩手県の重要文化財吉田家文書に属する）の中の二つで、震災を乗り越えて現在に伝わる大変貴重なものです。これらは、現存する最古の高田松原（高田松原と今泉松原）の絵図と言えます。



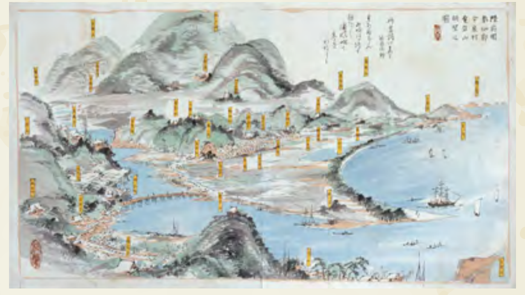
高田村絵図（吉田家文書　1822年）
資料提供：陸前高田市教育委員会（画像切り取りとテキスト加筆）

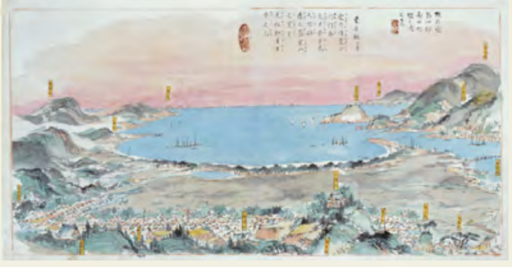


今泉絵図（吉田家文書　1822年）
資料提供：岩手県立図書館（画像切り取りとテキスト加筆）

1891 明治24年　明治時代の高田松原

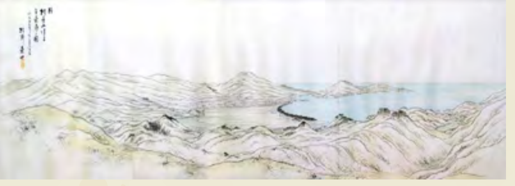
明治24（1891）年に画家蓑虫山人（みのむしさんじん）が旅日記に描いた眺望図からも、極めて鮮明に、当時の松原の姿を伺い知ることができます。「今泉村愛宕山之眺望図」と「高田町旭之浦之景」は、蓑虫山人が、それぞれ、今泉村の愛宕山と高田町背後地から眺めた風景を描いたとされる絵図です。これらの絵図から、今泉村と高田町（村から町に表記が変わっている）の集落と松原との間には、広大な空間が広がっていました。そして、この空間には、田圃や畑等の人の営みの風景と川や沼地等の豊かな自然の風景がありました。高田松原とその周辺の原風景は、人と自然がつくりあげたものだったのです。


陸前国気仙郡今泉村愛宕山眺望之図（蓑虫山人作　1891年）
資料提供：愛知県長母寺、岩手県立博物館


陸前国気仙郡高田町旭之浦之景（蓑虫山人作　1891年）
資料提供：愛知県長母寺、岩手県立博物館

1896 明治29年　明治三陸津波と高田松原

明治29（1896）年6月15日の明治大津波から二カ月ほど過ぎた8月21日に、今泉村出身の画家吉田東岬（よしだとうこう）が描いた「横手山からの眺望図」です。山の裾野にある集落と遥かかなたに見える高田松原、そして、広大な自然の景観が広がっています。震災直後にもかかわらず、沢山の松林が残っていたこともわかり、貴重な絵図と言えます。

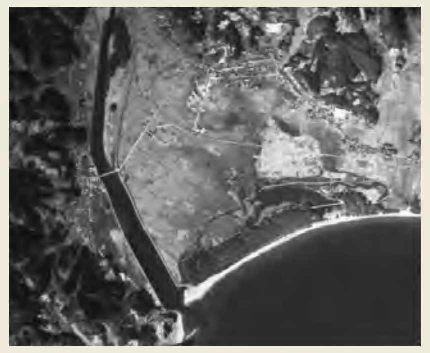

横手山眺望図（吉田東岬作　1896年）
資料提供：「名勝：高田松原展」編集・出版者・熊谷睦男氏

1900 明治33年　著名な詩人の歌碑や偉人の顕彰碑

高田松原は、詩人石川啄木や高浜虚子が来遊するなど、文学と歴史の地でもありました。明治33（1900）年石川啄木が盛岡中学校三年の時、修学旅行で高田松原に来遊しました。7月21日、長部浜で遊泳し、船で松原に渡り、高田町の伊東屋に泊まったという記録があります。氷上山にも登頂しています。高浜虚子は、昭和2（1927）年に最初の「日本百景」の選定審査委員として高田松原を訪れた折、「高田松原、草臥れて即ち憩う松落葉」という歌を詠んでいます。啄木の歌碑は、昭和33（1958）年に建立され、処女詩集「一握の砂」の中から「命なき砂のかなしさよ、さらさらと、握れば指の間より落つ」の歌が刻まれていました。しかし、昭和35（1960）年のチリ地震津波で流失し、昭和41（1966）年に、旧友金田一京助博士直筆の歌碑が再建されました。（参考資料：「名勝：高田松原展」熊谷睦男）
そして、平成23（2011）年の東日本大震災によって、他の石碑、例えば、菅野杢之助と松坂新右衛門の顕彰碑等とともに、再び流失しました。令和3（2021）年12月、石川啄木没後百年記念事業実行委員会が、古川沼西の松原大橋の近くに三番目の啄木の歌碑を設置しました。（参考資料：東海新報）

1933 昭和8年　昭和三陸大津波とチリ地震津波

高田松原は、昭和8（1933）年の昭和三陸津波の後、古川沼の南東部の湿地帯に訪問者の利便のため陸橋が作られました。この結果、陸橋の海側に残った湿地帯が三角沼（さんかくぬま）になりました。昭和20（1945）年の米軍航空写真には、この陸橋と三角沼が写っています。それから3年後の昭和22（1948）年に、陸橋の北東部に競泳場が設置されました。当時、気仙郡では、唯一のプールで、25mありました。（参考：熊谷睦男氏のお話）
ちなみに、昭和32（1957）年には、松原の海側の堤防に沿って、魚群探知ためのセスナ機の飛行場ができました。このセスナ機は、観光客の遊覧飛行にも使われました。この頃、夏の砂浜では、水着姿のモデルを被写体にアマチュア向けの写真撮影会等も開かれました。昭和35（1960）年のチリ地震津波後、競泳場はなくなり、三角沼が埋め立てられ、その跡地は、野球場になりました。この時の震災復興事業では、古川沼の下流の河口水門にフラップゲートが設置（1963）されたほか、防潮堤と気仙川の堤防が、5.5mの高さになりました（1966）。チリ地震津波の水位に合わせた対応でした。（参考資料：陸前高田市史）


高田松原と市街地（米軍航空写真　1945年）
資料提供：国土地理院（画像切り取り）

市街地化と高田松原
（鉄道の敷設とバイパス国道45号）

昭和8（1933）年の大船渡線の鉄道の敷設は、氷上山麓の山際にあった高田町の町並みが、次第に、高田松原へ向かうような市街地化の始まりでした。12年後の昭和20（1945）年に撮影された米軍航空写真には、高田町から南に突き出た駅前通りに沿って新しい住宅が並びはじめていることがわかります。この市街地化は、昭和30（1955）年に陸前高田市が誕生してから加速されます。館の沖を埋め立てて新庁舎を建設（1958）。チリ地震津波以降は、駅前地区（1960－76）や古川沼に隣接した曲松地区（1969－1980）等の区画整理事業を実施。町のインフラとして、市民会館（1965）、陸前高田ユースホステル（1969）、市民体育館（1976）、市立図書館（1978）や市立博物館（1979）等も整備されていきました。何よりも昭和57（1982）年に気仙大橋の完成と新国道45号の開通により、高田町の市街地は、ついに、高田松原の背後地に到達したのです。（参考資料：陸前高田市史）

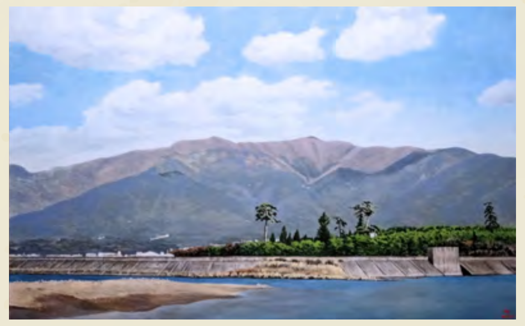
他にも貴重な資料がたくさん！
この二次元コードを読み取ってみてね。

1970 昭和45年　広田湾埋め立て開発計画と高田松原

陸前高田市は、高度成長時代、経済や産業の振興のため、昭和45（1970）年1月、広田湾工業開発を柱とした「新市総合開発計画」の方針を発表しました。広田湾の小友浦と脇之沢漁港の向かいを中心に埋め立てし、大型の臨海性工業団地（石油・鉄鋼・飼料等）、長部港付近に水産加工コンビナート、高田松原の東方に隣接する米崎町に木材関連工業地帯をつくるという計画でした。この計画に反対して、広田湾の漁民とそれを支援する内外の民間団体等が立ち上がり、十数年に及ぶ反対運動を繰り広げました。その結果、この「新市総合開発計画」は事実上凍結することになりました。その代わり、市は、市勢発展計画の柱として、新しく高田松原を中心としたリゾート構想を発表しました。（参考資料：陸前高田市史）

1978 昭和53年　高田松原と奇跡の一本松

チリ地震津波から18年後の昭和53（1978）年に、高田町出身の熊谷睦男氏が描いた松原の絵の中に、数本の背の高い松の木が確認できます。これらは、江戸時代に植えられた松と考えられます。その中の一本が、後に「奇跡の一本松」として知られる松でした。その周りには、チリ地震津波以来植えられた若い松が沢山茂っていましたが、平成23（2011）年の津波で、この一本松を除いてすべて流されてしまいました。この松だけが、江戸時代以来の様々な津波（明治三陸津波、昭和三陸津波、チリ地震津波）を乗り越えてきたのでした。（参考資料：熊谷睦男氏）

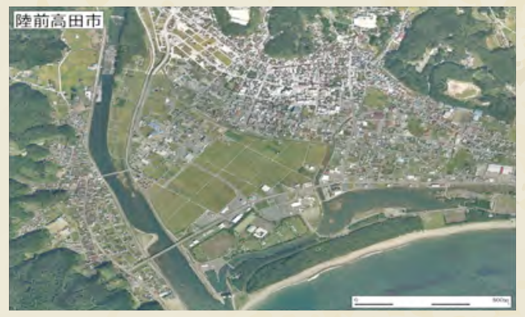

一本松（熊谷睦男氏作　1978年）
資料提供：熊谷睦男氏

1987 昭和62年　高田松原とリゾート構想

国が昭和62（1987）年リゾート法を制定すると、岩手県は、気仙地区をリゾート法の第一候補にあげました。これにより、国は「さんりく・リアス・リゾート地区」を指定（1989）し、市は「水辺空間を利用したリゾート構想」を打ち出しました。その結果、高田松原周辺に、キャピタルホテル1000、道の駅タピック45、野外活動センター、海と貝のミュージアム、B&G海洋センター、古川沼下流の津波水門とヨットハーバー、浄化処理センター等の多くの大型建造物が建ち並ぶことになりました。（参考資料：陸前高田市史）
しかし、やがてバブルがはじけ、全国のリゾート・ブームが終焉を迎えると、市のリゾート構想の要であったホテルは経営困難に陥り（その後、民事再生法で再建）、高田松原背後地の温泉施設（タラソセラピー）の建設計画も平成15（2003）年に廃案、リゾート開発の一時代が終わりました。

2011 平成23年　東日本大震災

平成23（2011）年3月11日、千年に一度と言われる未曾有の大津波が当市を襲いました。この震災では、高田松原とその周辺のみならず、陸前高田市の中心市街地のほか、半島部や山間部にも津波が来襲し、壊滅的な被害を与えました。人的被害だけでも、明治三陸津波での当市の犠牲者817人（昭和三陸津波の106人、チリ地震津波の8人）（市史第八巻）の二倍以上の1800人を超える犠牲者（最終集計は未だ終わっていません）を出しました。その中でもまだ200名程の方が行方不明となっているのです。



震災前の高田松原と市街地
資料提供：グーグル・マップ（テキスト加筆）

復興事業と高田松原の将来

復興事業によって、高田松原の防潮堤の高さは以前の5.5mから12.5mに引き上げられ、気仙川河口に津波水門が建設されました。また、気仙町今泉地区と高田町の二つの市街地が、それぞれ主要部で海抜10mと12mの高さに嵩上げされました。かつては陸中海岸国立公園として知られた高田松原は、高田松原津波復興祈念公園として整備され、犠牲者への追悼と鎮魂、震災の記憶と教訓の伝承、そして復興に対する強い意志の発信のための場として活用されています。失われた松林の跡地には、岩手県や市民団体「高田松原を守る会」等によって4万本の松の苗木が植えられ、松原の再生が始まっています。公園内の建造物を撤去（震災遺構、道の駅、伝承館や浄化処理センターを除く）したり、かつて松原地内にあった野球場やサッカー場等も国道45号以北に移築再建することで、高田松原や古川沼周辺も自然豊かな環境へと変貌しつつあり、昔の風景がよみがえってくるように感じられます。